



Vol.72

机の上の小さな変革



気まずさの発生

こんにちは、菅俊一です。今回は、生きていくなかでときどき訪れる「気まずさの発生」という、私が定義した感覚についてみなさんと考えてみたいと思います。

私は「状況が変化したことで、自分に過失がないのに周囲から悪いことをしたように受け取られるような気まずさ」を「気まずさの発生」と定義しています。みなさんにはそのようなケースを思い出していただきたいのです。まずは私の例を紹介するので、「確かにこれに似たことがあった」と思い出してみてください。

エピソード1 喫茶店

次の予定まで時間があったので、読書をしに喫茶店に入ったところ、席がガラガラだったため4人掛けの席に案内され、コーヒー片手にしばらく本を読んでいた。

すると、急に店内が混み始めて満席になった。ふと顔を上げて入り口を見ると、ちょうど4人連れの客が店員に満席だと告げられ、不機嫌な顔をして店から出るところだった。その際、こちらを少し睨んでいた。

その瞬間ハッとしたのだが、おそらく私は、店が混雑しているにもかかわらず1人で4人席に陣取っている非常識な人間だと思われていたのだろう。自分がこの席を選んだわけではなかったが、そう思われているのだろうなと気まずさを感じた。

エピソード2 ドラッグストアの自転車置き場

自転車で近所のドラッグストアに行くと、駐輪場から

大きくあふれて多くの自転車が停まっていたので、仕方なくさらにその隣に停めた。

買い物をして店から出てくると、ほかの自転車はすべてなくなり、私の自転車だけが駐輪場から離れたところに置かれたままだった。

あとから来て自転車を駐輪場に停めた人に怪訝な顔で見られたのだが、きっと正しく駐輪場を使わずに入り口近くに停めた非常識な人間だと思われたのだろうと、悲しい気持ちになった。

出来事の連なりを想像する

いかがですか？ このような感情は、みなさんも日々どこかで抱いているのではないかと思います。

どちらも当初の状況では許容されていた行為が、その状況が解消されてしまったために許容されなくなってしまったという構造を持っています。

このように、最初の状況が他者と共有されていないために発生する誤解を受けたときの気持ちを「気まずさの発生」と定義してみました。

私たちは「いまここで起きていること」だけで物事を判断してしまう傾向がありますが、その裏には、もっと前にそうならざるを得なかった理由があります。

自分に起きたエピソードを思い出すことで、他者に対しても「もしかしたら、その前に……」と、相手の立場で想像できるようになるかもしれません。



PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、さまざまなメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』『ルール？本』など。